

報告

「環境教育」の視点からみた 幼稚園園庭樹木の現状と活用の課題

大澤 力
東京家政大学

The Present Situation of Garden Trees in Kindergartens
and the Problems of their Practical Use
from the View Point of "The Environmental Education"

Tsutomu OOSAWA
Tokyo Kasei University
(受理日1998年10月5日)

1. はじめに

幼稚園の園庭は、子どもたちにとって大切な遊び場である。そこでは、四季の変化に彩られた楽しい自然とのかかわりが展開されている。こうした活動を十分に幼児教育へ取り入れることは、子どもたちの心と体の成長に大きな影響を与えるものなのである。

先頃、文部省の諮問機関から発表された「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について—最終報告—」にも、教育内容の改善に当たり重点とすべき事項として、「自然体験、社会体験などの直接的、具体的生活体験を重視すること」とあり、「園庭で植物を栽培したり、小動物を飼育して生き物の成長をともに体験するなど身近に自然を体験する機会を充実することも必要」とある(文部省,1997)。このことは幼児のみならず児童にも言えることであり、環境教育についてみると、沼田は「幼児や小学生の段階での環境教育では、(略)基礎的な自然観察、自然誌教育こそ最も重要である」と「環境教育論」の中で述べている(沼田,1982)。

このような、園庭や校庭での自然とのかかわりを考える時、植物は動物に比べ、変化の速度が遅く、幼児や児童に与える影響が少ないかのように

思われるが、四季を通して表される植物の変化や各時節の花・実・葉といったものを使っての教育などは、幼児や児童の心に深い印象を与えることが多い。中でも、樹木は見過ごし易いが、その景観から情緒を養うといった保育における自然環境の構成要素としての働きや、草木遊び・観察の素材・ままごとの材料といった遊びの材料、花・落ち葉・たきびといった季節の移り変わりを知る材料、木登り・日陰といった運動遊びの材料としての働きなどが挙げられる(大澤・山内,1983;山内他,1990)。

こうした樹木の効用は、幼稚園より始まる学校教育の流れの中で継続して子どもたちの成長にかかわる重要な要素のひとつと考えられよう。そこで、小・中・高等学校の校庭にも目を向けてみたいと思う。いくつかの資料にあたってみたが、「校庭の樹木」は「校庭の樹木の多くは、植栽によるものである。(略)都市化の進んだ地域にあっては、樹木のある校庭は、公園などとともにかけがえのない緑の空間となっている。(略)樹木も四季に応じた成長をし、生殖をし、年ごとに変化を示している。『植物の形とくらし』に近づいたための、最も身近な材料として活用されてよい。校庭の樹木を『静』から『動』の存在へと、見方を変えていきたい」と述べており(岩瀬・川名,1991)、

(問い合わせ先) 〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1 東京家政大学家政学部児童学科保育内容研究室

こうした樹木と子どもたちとのかかわりには、環境教育にとっても有益な内容が多く含まれているように思われる。

大澤は、保育での樹木の活用の重要性を指摘しつつ、園庭樹木についての検討を実施している（大澤他,1981,1982,1983,1984,1987,1988）。さらに、幼児期における環境教育の方法としても、樹木の活用の有用性を指摘し提案している（大澤,1996）。そこで目指している方向は「校庭の樹木」同様、子どもたちと樹木とのかかわりを深めつつ樹木を愛護し、ひいては自然や環境を愛護する心を育ててゆくことであった。

以上のようなねらいのもと、幼稚園園庭樹木に関する植栽と幼児教育とのかかわりの現状を探りつつ、その活用について論考したものが本研究である。

2. 調査方法

1) 対象園

東京都K区（東部商工住混在地域）の公立幼稚園7園（表1）

2) 手続き

それぞれの園に直接出向き、各園長に「園庭樹木に対する関心度、幼児教育の内容とのかかわり」など、樹木と幼児教育とのかかわりについての聴き取り調査を実施するとともに、園庭で樹木の状況を観察・記録した。

3) 調査月日

1996年9月

表1 調査園の概要（1996年9月現在）

園名	創立年	園庭面積	クラス数	園児数
A	1979	840	4	77
B	1978	488	4	64
C	1980	1105	2	27
D	1977	780	6	116
E	1976	837	4	91
F	1976	650	2	44
G	1978	1094	2	35
合計		5794㎡	24クラス	454名

3. 結果および考察

1) 園庭樹木の植栽実態

各園における植栽樹種数および植栽数、7園合計植栽数の上位30種を表2に示す。

樹種数では8種のA園から37種のG園までかなりの幅があった。また、植栽数では27本のA園から277本のC園までと、さらに大きな差が生じていた。園児数・園庭面積・設立年度など様々な要因があり一概にいえないが、各園の樹木に対する姿勢には違いがあるようである。

そこで、樹木の質的な面にも目を向けて実態をさらに浮き彫りにしてみたい。まず、科名による分類に着目してみると、ばら科6、つつじ科5、つばき科3、もくせい科2、すいかずら科2、みずき科2、その他10といった結果であった。ばら、つつじ、つばき、もくせい科はいずれも花を楽しむ花木として分類されているものであり、生け垣や植え込みとして常用され、入手や育成が容易であるとされる代表的な品種の仲間である。しかも、植栽数最上位10種についてみると上記以外で7位にひのき科のカイズカイブキ、10位にもちのき科のイヌツゲが入っているが、これらも同じ様な仲間の樹種である。こうしたことから、花を楽しむ・葉の緑を楽しむといったことなど景観や目隠し・防音・防風・防災などを目的に、入手や育成が容易なことで植えられている樹木が多いことがわかった。この他、ウメ・ウンシュウミカン・ビワ・カキ・ブドウといった果樹が各園当たり1~3本と、数は少ないものの多くの園で植栽されていることが目立った。

一方、7園の園長に対する聴き取り調査から園内の樹木の植栽実態をまとめてみると、

・最初に植栽した樹木は区役所の教育施設課が考えて導入した（7園）

----街路樹や生け垣用の樹種が多い

・途中より植栽した樹木は園の教師が考えて導入した（7園）

卒園や周年記念樹----果樹が多い

父母からの寄付----果樹が多い

区役所からの寄贈----毎年、緑化運動などに

表2 各園における樹種および植栽数(上位30種)

園名		A	B	C	D	E	F	G	合計
樹種数		8	16	30	25	26	30	37	172
No.樹種名・科名/植栽数		27	64	277	59	121	56	76	680
1	サツキツツジ つつじ		6	76	8	32	4	4	130
2	オオムラサキ つつじ	4		63		16	2	1	86
3	サザンカ つばき		11	31	1	9	2	2	56
4	キンモクセイ もくせい		23	1	1	3	2	3	32
5	サンゴジュ すいかずら			25				1	26
6	ツバキ つばき	2	3		1	12	1	5	24
7	カイズカイブキ ひのき	15			6				21
8	ウメ ばら	1	1	4		8	3	1	18
9	ドウダンツツジ つつじ			1		1	7	8	17
10	イヌツゲ もちのき			2	8			6	16
11	クルメツツジ つつじ			16					16
12	ウンシュウミカン みかん	1		8	1	1	4	1	16
13	ソメイヨシノ ばら	2	1	2	3	2	1	2	13
14	イロハモミジ かえで		2	4	2		2	2	12
15	サカキ つばき			5	5	1		1	12
16	ヤマザクラ ばら		3	3		2	2	2	12
17	ユキヤナギ ばら			6	1	1		3	11
18	アベリア すいかずら				3	7			10
19	イチヨウ いちよう			6	1		2	1	10
20	クチナシ あかね			1		4		5	10
21	ハナミズキ みずき		3			1	2	2	8
22	アオキ みずき		3	3				1	7
23	バラ ばら			2		3		2	7
24	ビワ ばら			3	1	1		1	6
25	カキ かきのき					2	2	1	5
26	ムクゲ あおい		1			2		2	5
27	ブドウ ぶどう				3		1		4
28	アセビ つつじ			3					3
29	キョウチクトウ きょうちくとう					3			3
30	ヒイラギ もくせい		1					2	3

より定められた一覧より希望により入手可能---
果樹や花木が多い

園の予算にて入手---樹木はほとんど入手せず、草花や野菜の苗、種などが多い

・団地の一部である為様々な制約があり、思うよ

表3 都立幼稚園園庭の樹木の状況

3m以上の樹木(本)	園数	割合(%)
1~10	115	46
11~20	56	23
21~30	20	8
31以上	56	23
合計	247	100

東京都立教育研究所研究紀要:1984

幼稚園「自然」の物的環境と保育の実態より

うに樹木が植えられない(5園)

・裏庭(狭い路地のような所も含めて)の樹木で遊ぶ幼児もいる(3園)

といった結果が得られた。表2の結果と考え合わせると幼児教育に直接携わる教師たちは、果樹に着目していることが明確となった。

1984年と調査年度は遡るが、東京都立教育研究所が都内全公立幼稚園を対象に取り組んだ「幼稚園自然の物的環境と保育の実態」がある。その中の「幼稚園、施設内の樹木の実態」で幼児とかかわりがある樹木(3m以上)について調べている(東京都立教育研究所,1984)(表3)。

この結果から、樹種の特定はできないものの3

表4 小・中・高等学校校庭に多く見られる植栽樹種

幼稚園園庭樹との共通種		小・中・高校の校庭独自種	
樹種名	科名	樹種名	科名
サツキツツジ	つつじ	クロマツ	まつ
キンモクセイ	もくせい	シュロ	やし
ツバキ	つばき	アジサイ	ゆきのした
カイズカイブキ	ひのき	メタセコイア	すぎ
ウメ	ばら	ヒマラヤスギ	すぎ
イヌツゲ	もちのき	マサキ	にしきぎ
ソメイヨシノ	ばら	プラタナス	すずかけのき
イロハカエデ	かえで	ネズミモチ	もくせい
イチヨウ	いちよう	シダレヤナギ	やなぎ
ヒイラギ	もくせい	ヤツデ	うこぎ
		フジ	まめ

岩瀬徹・川名興著「校庭の樹木」(1991)の資料をもとに筆者が作成

m以上の高木になる樹木が本調査の結果と同様にかんりの数の幅をもって存在しており、園児数・園庭面積・設立年度など様々な要因があり一概にいえないうまでも、15~6年前も各園の樹木に対する姿勢には大きな違いがあったようである。

幼稚園で教育を受けた子どもたちは、小学校・中学校・高等学校へと進学し、さらに大きく成長してゆく。子どもたちの幼稚園から始まる学校生活という、一つの流れの中での教育環境としての校庭樹木の位置付けをさらに探してみたい。校庭の樹木という内容で様々な資料を調べた中で、広島県呉市小・中・高等学校61校(呉市教育委員会, 1973)、大阪市小学校34校(菅井, 1985)、千葉県安房郡津市小・中学校142校(南総地方教育センター, 1983)、宮城県白石市小・中学校21校(白石市植物誌, 1983)についての調査をとりまとめ考察したものは注目に値する。これは先に挙げた「校庭の樹木」の中で取り上げられているものであるが、総合集計として出現頻度の高い樹種を21種あげている(岩瀬・川名, 1991)。今回の幼稚園の調査結果とこれらの結果を踏まえ、比較しやすいように筆者が作成した一覧を表4に示す。

幼稚園の植栽数最上位10種のうち、サツキツツジ・キンモクセイ・ツバキ・カイズカイブキ・ウメ・イヌツゲといった6種が小・中・高等学校との共通種として登場していた。このことから、小・中・高等学校の校庭と幼稚園の園庭で植栽され

ている樹種の主要なものは、共通性の高いことがわかった。すなわち、公共性を考えると当然のことと言えるのであるが、花を楽しむ、葉の緑を楽しむといったことや、景観や目隠し・防音・防風・防災などを目的として生け垣や植え込みに活用され、入手や育成の容易な樹種が多く栽植されているということである。また、幼稚園と異なった特徴として、クロマツ・メタセコイア・ヒマラヤスギなど針葉樹が多く、果樹はウメのみといったようなことが挙げられた。

2) 園庭樹木の特徴および有用事項

2-1 環境構成要素としての園庭樹木

さらに考察を深めるため、上位30種の特徴や有用事項を表5にまとめた。

なお、これらの特徴や有用事項は、幼稚園における幼児と樹木のかかわりを調査研究をした報告・論文(大澤他, 1981; 加藤他, 1981; 大澤他, 1982; 大澤他, 1984; 石田他, 1984; 加藤他, 1985; 大澤他, 1987; 大澤他, 1988)、および幼児と自然のかかわりに関する著書(山内他「領域環境」, 1990; 山内他「環境」, 1990; 山内他「環境とかかわる子どもたち」, 1993; 山内他「環境アイデア大事典」, 1993; 山内「幼児からの環境教育」, 1994)を参考にしてまとめたものである。

まず、結果の詳しい考察をはじめの前に考慮しておかなければならないことがある。それはサンプリングの点である。今回、筆者が実施した調査は地域で言えば東京都のK区のみ、サンプル数も7園と限定されている。一方、小・中・高等学校の調査は、地域で言えば北は宮城県白石市から南は広島県呉市まで、サンプル数でも総計258校を数えている。こうしたサンプリング条件の違いにも配慮しつつ今後の考察をすすめたい。

最初に環境構成要素としての視点を考察してみたい。目隠し・防音・防風・防災に着目してみると、常緑・高木樹が最適ということになる。確かに上位30種のうち常緑樹が18種、さらにそのうち高木となると8種に絞られ、約3分の1が適しているということになる。また、景観としての視点では、常緑樹18種、落葉樹12種ということで3:2と

表5 植栽数順にみた、樹木の特徴および有用事項（上位30種）

No. 樹種/特徴	植栽数	常落	広針	花	香	葉	紅	実	登	虫鳥	項数
1 サツキツツジ	130	常	広	○		○					2
2 オオムラサキ	86	常	広	○		○					2
3 サザンカ	56	常	広	○		○		○			3
4 キンモクセイ	32	常	広	○	○	○				○	4
5 サンゴジュ	26	常	広			○		○		○	3
6 ツバキ	24	常	広	○		○		○			3
7 カイズカイブキ	21	常	針			○					1
8 ウメ	18	落	広	○		○		○		○	4
9 ドウダンツツシ	17	落	広	○							1
10 イヌツゲ	16	常	広			○					1
11 クルメツツジ	16	常	広	○		○					2
12 ウンシュウミカン	16	常	広		○					○	3
13 ソメイヨシノ	13	落	広	○		○	○				3
14 イロハモミジ	12	落	広			○	○	○			3
15 サカキ	12	常	広			○					1
16 ヤマザクラ	12	落	広	○		○	○				3
17 ユキヤナギ	11	落	広	○							1
18 アベリア	10	常	広	○							1
19 イチョウ	10	落	広			○	○	○			3
20 クチナシ	10	常	広	○	○	○					3
21 ハナミズキ	8	落	広	○							1
22 アオキ	7	常	広			○		○			2
23 バラ	7	落	広	○	○					○	3
24 ビワ	6	常	広					○		○	2
25 カキ	5	落	広			○	○	○		○	4
26 ムクゲ	5	落	広	○						○	2
27 ブドウ	4	落	広					○		○	2
28 アセビ	5	常	広	○		○					2
29 キョウチクトウ	5	常	広	○		○					2
30 ヒイラギ	4	常	広			○					1

常：常緑樹 花：花を觀賞する 実：実を食せる、あそべる
 落：落葉樹 香：香りを楽しむ 登：登ることを楽しむ
 広：広葉樹 葉：木の姿や葉を觀賞する 虫・鳥：虫や鳥がやってくる
 針：針葉樹 紅：秋の紅葉を楽しむ 項数：その樹種の有用事項数

保っていたのである。この結果は、調査の地域差やサンプル数といった違いを配慮したとしても言えることのように思われる。最近、雑木林の重要性なるものが見直されている。そこには、複雑多岐に亘る生態系（スギ・ヒノキ等の単一種による造林に比較して）が営まれ様々な植物や動物が生息できる条件が用意されるのである。このような、いわゆる種々雑多な植物や動物が生息できる雑木林なるものを思い浮かべると、その大部分が広葉樹であり四季の変化も顕著に現れるなど、小・中・高等学校の校庭より面積・予算など種々の条件で厳しいと思われる幼稚園の園庭における雑木林的な広葉樹の林の価値が理解できるであろう。

2-2 幼児教育内容と園庭樹木
 幼児教育内容と園庭樹木の関わりについての各園長の聴き取り調査をまとめてみると、
 ・果樹を活用している（7園）
 樹種---キウイ、ブドウ、リンゴ、ブルーベリー、ウメなど
 ・野鳥や昆虫を呼ぶような樹木を増やすよう心掛けている（7園）
 樹種---ヤマモモ、ヤマザクラ

なり、植栽数では常緑樹：落葉樹が5：1で、常緑樹が圧倒的な優位を示していた。一年中、緑を茂らせる常緑樹の良さが生かされている現状が伺える。

次に、針葉樹と広葉樹といった分類にも着目してみると、カイズカイブキ1種のみが針葉樹であり、その他29種はすべて広葉樹という明確な結果が得られた。この結果は、前項で取り上げた広域調査の小・中・高等学校の校庭で植栽されている樹種と好対象をなすものである。小・中・高等学校とは違い、幼稚園では広葉樹が圧倒的な優位を

など
 ・木登りのできる木をつくるようにしている（3園）
 樹種---シイノキ、タイサンボク、モミジ、ツバキ、ヤマモモなど
 ・花の蜜を吸う、色水あそび、花つみにツツジやサツキを活用している（2園）
 といったことが、目立った意見として登場してきた。

ここで詳細を掴むために、表5の有用事項として挙げた、花を觀賞する・香りを楽しむ・木の姿

や葉を觀賞する・秋の紅葉を楽しむ・実を食せて遊べる・登ることを楽しむ・虫や鳥がやってくるといった7項目について詳しく考察してみる。

1) で分かったように、木の姿や葉を觀賞する21種や花を觀賞する18種といった生け垣や植え込みに用いられるものが圧倒的に多く、その次は、食べられる実がなる11種、虫や鳥がやってくる9種といった果実が色づくものである。さらに、防災・防風そして、木の姿や葉を觀賞することとのかかわりが色濃く幼児教育でもよく活用される紅葉を楽しむもの5種。花を觀賞することとのかかわりが色濃く五感のうち臭覚を刺激し香りを楽しむもの4種。最下位が全身運動である登ることを楽しむもの0種といった結果であった。

樹木に関してまとめてみると、葉・花・実といった有用性の序列があった。そして、五感とのかかわり

わりでいうと、視覚が圧倒的に多用され、次に味覚・臭覚が活用されている。しかし、触覚や聴覚はそれほど活用されていないようである。

上位30種のうち有用事項が4項目あるものは、花木のキンモクセイと果樹のウメ・カキであり、これら3種が共通している有用事項は木の姿や葉を觀賞すること、虫や鳥がやってくることであった。次に3項目あるものでは、花木が多くサザンカ・ツバキ・ソメイヨシノ・ヤマザクラ・クチナシ・バラであり、秋の紅葉を楽しむイロハモミジとイチヨウがこれに続き、果樹としてのウンシュウミカンと生け垣としてのサンゴジュがあがっていた。虫や鳥といった小動物とのかかわりを意識して樹木を選び植える傾向もある。

幼児教育の向上に関する様々な活動を行っている幼少年教育研究所の研究誌幼少年教育16号に

表6 W幼稚園園庭における年間の主な樹木と遊び

	樹種名	開花期	結実期	遊びの内容・題材など
常 緑 樹	ヒノキ			冬の姿を見る
	スギ			冬の姿を見る
	ヒマラヤスギ			冬の姿を見る
	シュロ	5月下旬	7月上旬	葉でうちわ、実でままごと
	*サツキツツジ	6月上旬		花蜜を吸う
	*アオキ	9月中旬	12～1月	実でままごと、数当て
落 葉 樹	*サザンカ	10月末	5月	花卉集め、花卉でままごと
	ジンチョウゲ	3～4月		花の香り
	*ソメイヨシノ	4月上旬		花卉集め、葉でままごと、造形遊び、虫（アメリカシロヒトリ）
	*ヤマザクラ	4月下旬	6月	葉でままごと、造形遊び
	ヤエザクラ	5月上旬		花卉集め、葉ままごと、造形遊び
	ハナミズキ	5月上旬		花卉集め
果 樹	フジ	5月中旬	7月	花卉集め、花卉や実でままごと、虫（アメリカシロヒトリ）
	*イチヨウ		10月	葉で造形遊び
	ヤナギ			枝でターザン遊び、虫（アメリカシロヒトリ）
	モクレン	3月下旬		花の香り
	モモ	4月中旬	6月下旬	食用、落果遊び
	サクランボ	4月中旬	6月中旬	食用、葉で造形遊び
果 樹	スモモ	4月中旬	7月上旬	食用、落果遊び
	*ミカン	5月中旬	11月	食用、落果遊び、あぶりだし、虫（アゲハ）
	グミ	5月中旬	7月	食用
	*ブドウ	5月中旬	8月下旬	食用、虫（コガネムシ類）
	*カキ	5月中旬	10月中旬	食用、花ネックレス、花ままごと、葉人形
	ヒメリンゴ	5月中旬	10月中旬	果実ままごと
	ザクロ	6月	11月上旬	食用
	*ウメ	2月	6月	花の香り、落果遊び、虫（アメリカシロヒトリ）

*印は表2の幼稚園における上位30種に含まれているもの

()内は遊べる昆虫名

「幼児期にふさわしい園庭環境の考察 その1 - 園庭の園具・教具及び施設等への一考察-」が掲載されていた。「今回の調査では、多岐に亘る子どもの遊び方がみられた。固定遊具（施設）で32種類、移動遊具で41種類を数え、様々な遊具等の中で、最低限必要であろう遊具等（調査対象園に全てある遊具等、具体的に砂場、滑り台等）精選し、提案したい。」とある。ここにある固定遊具32種のうちの1種が樹木であり、樹種としてはモミジ・ツバキ・ヤマモモがあげられていた（町山、1996）。

さらに考察を進めるために、一園のみであるが埼玉県の私立W幼稚園の一年間にわたる保育での樹木とのかかわりを調査集計した結果を表6に示す（大澤他、1982）。

今回の調査対象であった7つの幼稚園の現状と比較してみると、常緑樹では、8種のうちサツキツツジ・アオキ・サザンカといった3種。落葉樹では、8種のうちソメイヨシノ・ヤマザクラ・イチヨウの3種。果樹では、10種のうちウンシュウミカン・ブドウ・カキ・ウメの4種が共通している。全体では、26種のうち10種、38.5%が共通していたこととなる。しかし、その遊びの内容・題材などを検討してみると、ミカンのあぶりだしやカキの実ネックレスなどのように7つの幼稚園の園長からの聴き取り調査には現れない内容が目立った。また、異なった樹種として、常緑樹では、シュロが葉でうちわ・実でままごとといった遊び。落葉樹では、ヤエザクラが花の豪華なことや開花期が一般のサクラより遅れることもあり、花卉集め・葉ままごと・造形遊びなど多用されていた。フジが花卉集め・花卉や実でままごと・虫としてアメリカシロヒトリと遊ぶといった活動があった。さらに、ヤナギの枝でターザン遊びというのも特徴的である。最後に果樹であるが、W幼稚園主要樹種全体26種中10種、そのほとんどが食用として幼児と共に味わうといった目的で植栽されていた。また、果樹には鳥や昆虫を呼び寄せる効果も期待されているのである。

3) 幼稚園の園庭に植栽したい樹種

岩瀬と川名は、小・中・高等学校の校庭に植えたい樹種の内容について以下の様に述べ、大きく3項目を挙げて提案している（岩瀬・川名、1991）。

「校庭にどんな樹木が多いかは、前節であげた通りで、主要な樹種は共通性が高い。学校の植樹は、緑化、美観、それに入手や育成の容易さなどが、条件として優先されることが多い。現在ある樹種を学習上に活用していくことは大切であるが、さらに次のような観点から樹種を補っていくことを考えたい。

①地域の自然植生をつくる樹種

校庭に自然林を作ることができれば理想的であるが、それが無理としても地域の自然植生の主な樹種を植栽しておきたい。

常緑広葉樹の例・落葉広葉樹の例・針葉樹の例木

②葉や花、実の形を見るのに適した樹種

葉の形を見るのに適した例・花や実の形を見るのに適した例・食べられる実の例木

③話題となる樹種

生きている化石の例・和名と漢字の例・生活や産業に利用される例木・文学や歴史などにでてる例木

これらの提案は、小学校における『生活科』の目標である「身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、それらを取り入れて楽しく活動する」（文部省、1990）の学習効果を上げるために校庭やその周辺の樹木を活用すること。さらに、小学校高学年、中学校、高校の理科・社会・国語・芸術関連の科目との関わりなどから考えられているものである。

しかし、幼稚園という幼児教育の場における園庭樹木を考えてみると、幼稚園教育要領の第1章総則2幼稚園教育の目標にある「自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること。」や「多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること。」（文部省、1989）

など知識を得るというよりは、興味・関心や感性・創造性といった生涯にわたる人間形成の基礎を培う内容に対応した樹木の植栽が望まれるということになる。それには、視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚といった五感を十分に活用すると共に、おもしろく・楽しいあそびの教育内容の展開できる樹木が望まれる。前記の小・中・高等学校の校庭に植えたい樹種を参考にしてみると、①の自然林や②の葉花実は重要な位置を占めるものであろう。さらに、③の話題であるが、あくまでも「幼児にとっての」といった内容が大切である。そこで、2-2で述べた「樹木に関してまとめてみると、葉・花・実といった有用性の序列があった。そして、五感とのかかわりでいうと、視覚が圧倒的に多用され、味覚・臭覚が活用されている。しかし、触覚や聴覚はそれほど活用されていないようである。」といった事柄にも配慮しつつ提案を試みたい。

①地域の自然植生をつくる樹種

園庭に自然林を作ることができれば理想的であるが、それは難しいので地域の自然植生の主な樹種を植栽しておきたい

常緑広葉樹の例木

スダジイ・アカガシ・ツバキ・ヤブニッケイ

落葉広葉樹の例木

コナラ・クヌギ・ケヤキ・イロハカエデ・イヌシデ・ミズキ

針葉樹の例木

アカマツ・クロマツ・モミ

②花・葉・実・枝・幹を教育内容に活用するのに適した樹種

花を觀賞するのに適した例木

サツキツツジ・サザンカ・ツバキ・ソメイヨシノ・ヤエザクラ・ハナミズキ・フジ

香りを楽しむのに適した例木

キンモクセイ・クチナシ・ジンチョウゲ・モクレン・ウメ

木の姿や葉を觀賞するのに適した例木

サンゴジュ・カイズカイブキ・ウメ・ヒノキ・スギ・ヤナギ

秋の紅葉を楽しむのに適した例木

イロハモミジ・イチヨウ・カキ・ソメイヨシノ・ナナカマド

実を食べたりあそんだりするのに適した例木

ウメ・ミカン・カキ・ブドウ・リンゴ・アカマツ・マテバシイ・モミジ

登ることを楽しむのに適した例木

シイノキ・タイサンボク

虫や鳥がやってくるのに適した例木

ウメ・ミカン・カキ・ブドウ・ヤマモモ・ヤマザクラ・ムクゲ

③話題となる樹種

幼児の好む絵本や紙芝居や童話に関わる例木

モモ・リンゴ・カキ・クリ・シイノキ・トチ・モミ

幼児の好む歌や手遊びに関わる例木

モミジ・リンゴ・ビワ・アカマツ・マテバシイ・クヌギ

園の行事に関わる例木

ソメイヨシノ・モモ・ドイツトウヒ・モミ

地域の生活・産業などに関わる例木

コウゾ・ミツマタ・クスノキ・クワ・キリ・ヒノキ・ヒサカキ

生きている化石の例木

メタセコイア・イチヨウ・ソテツ

幼児教育にかかわる者が願うことのひとつに、子どもたちが幼稚園生活において四季の変化に彩られた自然とのかかわりをもった美しくも、楽しい教育内容が展開できることを挙げられるであろう。それを現実のものとすべく試みる時、園庭は重要な働きを成すものである。さらに、幼児の身近にある園庭の樹木は直接間接に作用を及ぼす貴重な教材・教具となる。このことは、幼児にとっての環境教育でも同様のこととなる。ここに、これまでの研究を基に望ましい園庭の植栽樹木を提案してまとめとする。

さらに今後の課題として、調査対象を増やすと共に園庭樹木と関わる教育内容の調査開発に努めてゆきたいと考えている。

謝辞

研究を進めるにあたり、有益なお力添えを頂いた東京家政大学山内昭道名誉教授および聖徳大学落合進助教授、東京都練馬高等保育学院佐藤牧人講師、調査に御協力頂いたK区の諸先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 千葉県南総地方教育センター,1983,研究紀要第2集
- 石田高行・大澤力・加藤輝夫・目黒徹三・山内昭道,1984,保育における植物の考察4 わせだ幼稚園における樹木と保育の関わりについての検討2,日本保育学会第37回大会研究発表要旨集,p282~283.
- 岩瀬徹・川名興,1991,「校庭の樹木」p134~138,全国農村教育協会,東京.
- 加藤輝夫・大澤力・石田高行・山内昭道,1981,保育における植物の考察1 保育雑誌の内容からの検討,日本保育学会第34回大会研究発表要旨集,p472~473.
- 加藤輝夫・山内昭道・石田高行・目黒徹三・大澤力,1985,保育における植物の考察6 ドングリの活用と自然環境,日本保育学会第38回大会研究発表要旨,p674~675.
- 呉市教育委員会,1973,改訂学校の樹木,呉市教育委員会指導資料NO.134.
- 町山芳夫,1996,幼児期にふさわしい園庭環境の考察-その1-園庭の園具・教具及び施設等への一考察-,幼少年教育NO.16,p36~40.
- 文部省,1989,幼稚園教育要領
- 文部省,1990,生活科指導資料
- 文部省,時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議,1997,時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について-最終報告-
- 沼田真,1982,「環境教育論」p34,東海大学出版会,東京.
- 大澤力・山内昭道・加藤輝夫・石田高行,1981,保育における植物の考察2 園庭における樹林についての検討,日本保育学会第34回大会研究発表要旨集,p474~475.
- 大澤力・山内昭道・加藤輝夫・石田高行・目黒徹三,1982,保育における植物の考察3 わせだ幼稚園における樹木と保育の関わりについての検討,日本保育学会第35回大会研究発表要旨集,p144~145.
- 大澤力・山内昭道,1983,保育における植物の考察-園庭における樹木についての検討-,幼少年教育NO.9,p8~17.
- 大澤力・井上道子・加藤輝夫・平山照子・岩瀬満佐江・石田高行・餅原譲・目黒徹三・曾根田寛・畑公夫,1987,果物の認識と描画表現に関する考察,日本保育学会第40回大会研究発表要旨集,p354~355.
- 大澤力・井上道子・加藤輝夫・平山照子・岩瀬満佐江・石田高行・餅原譲・目黒徹三・曾根田寛・畑公夫,1988,植物の認識と描画表現に関する考察,日本保育学会第41回大会研究発表要旨集,p106~107.
- 大澤力,1996,ミニシンポジウム幼児期の環境教育,幼児期の環境教育の方法論を考える-緑とのかかわりの実際を通して考える心と体を育む園の環境-,日本環境教育学会第7回大会研究発表要旨集,p171.
- 白石市植物誌編集委員会編,1983,白石市植物誌,白石市植物誌刊行会
- 菅井啓之,1985,大阪市内小学校の校庭の植物および上町台地の樹木,昭和57年度内地留学研究報告書,大阪府科学教育センター
- 東京都立教育研究所幼児教育研究部幼児教育研究室,1984,幼稚園「自然」の物的環境と保育の実態-自然環境と数量や図形の調査結果から-,59教研-11,p4~8.
- 山内昭道・八並勝正・大澤力,1990,「領域環境」p37~42,同文書院,東京.